

『東亜新報』編集局の人々 付『東亜新報』「論説」
」題目一覧（1941年1月1日 1942年12月31日）

著者	神谷 昌史
雑誌名	紀要
号	21
ページ	1-21
発行年	2019-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000030

『東亜新報』編集局の人々

付『東亜新報』「論説」題目一覧（1941年1月1日—1942年12月31日）

神谷昌史

抄録…

『東亜新報』は一九三九年七月から一九四五年の日本の敗戦まで、中国北京などで発行されていた日本語新聞である。これまでまとまった研究が存在しない同紙について、本稿では編集局の主要人物に着目し、様々な史料を用いてその来歴などをとりまとめる。取り上げる関係者は、社長であった徳光衣城、「東亜新報の三羽ガラス」と称された佐々木金之助・高木健夫・石川輝、論説委員であった高木富五郎・長谷川光太郎、済南支社の編集局長・支社長を務めた竹内順三郎、外交部長や天津支社編集局長を歴任した栗原一夫の八名である。

キーワード…東亜新報 外地メディア 国策 日本語新聞 占領下北京

はじめに

『東亜新報』は一九三九年七月から一九四五年の日本の敗戦まで、中国北京などいわゆる「北支」において発行されていた日本語新聞である。同紙は「北支派遣軍報道部が全華北を統合する純正な国策邦字紙の発行を必要と認め、軍及び興亜院の出资（三十五万円）を以て株式会社を創立、在来北京で発行してゐた北京新聞社、新支那日日新聞社を昭和十四年買収、国策新聞東亜新報社として出発した」ものであった（1）。

『東亜新報』は先に挙げた発行の経緯から、「北支軍の機関紙」（石川輝）、「陸軍肝いりの国策新聞」（山本武利）として語られることが一般的であるが、今まで本格的な研究は存在していない。『東亜新報』の原紙自体、日本国内でまとまった所蔵がなく、また当時の様々な資料やのちの回想類は種々存在しているが、それらを取り

まとめた研究がほとんどないことも相まって、実態の把握が難しいのが現状である。筆者らはこれまで『東亜新報』の原紙に当たるとともに、いくつかの研究成果をまとめてきた。別稿において編集局や論説委員についてその変遷等について検討したが（2）、本稿では編集局の主要人物について個人に着目し、様々な史料を用いてその来歴などをとりまとめたい。また、参考資料として『東亜新報』「論説」題目一覧（1941年1月1日—1942年12月31日）を付した。

『東亜新報』編集局関係者略伝

『東亜新報』が存在したのは、一九三九年から一九四五年のわずか六年間であった。しかしその短い間にも、同紙の編集に携わった中心的な人物は変遷があった。このことについて詳しくは、さきほど言及した別稿において検討を加えている（一

九三九年八月、四三年八月、四四年六月のそれぞれの時点での社内での職位については本稿の付表1を参照)。本稿ではそのうちの何人かについて略歴などを記すものである。

徳光衣城

一八八四年生まれ。本名徳光伊助。生家は一八七五年に開かれた大阪会議の舞台となったことで知られる大阪北浜の料亭花外楼である。早稲田大学政経科卒業。やまと新聞を皮切りに、報知新聞・大正日日新聞の記者、東京毎夕新聞編集局長、東方通信北京支局長、日本新聞聯合社内信局長、大阪毎日新聞社会部長(3)、中央新聞編集局長、京都日日新聞主幹(4)を歴任。一九三九年、東亜新報社創立とともに社長に就任した。戦後は夕刊紙新大阪などに関係した。一九五三年没。

俳人であり、『東亜新報』に掲載されていた俳句の投稿欄「東亜俳壇」の選者であった。北京の俳句雑誌『春聯』の中心的同人でもあった。また徳光の俳句は、『東亜新報』の名物コラムであった「新編北京横丁」(文・高建子||高木健夫)の冒頭を毎回飾っていた。

自伝・評伝などはないが、没後に編まれた文集として東亜会有志編『新聞人・徳光衣城』(東亜会有志、一九六九年)があり、「徳光衣城略年譜」も収められている。本稿では同書や『東亜新報おぼえがき』(5)および『第十三版人事興信録』下巻(人事興信所、一九四一年)を参照。

里見脩は徳光衣城以下の東亜新報幹部の構成について次のように指摘している。

東亜新報の社長には古野(伊之助)の推薦で徳光衣城が就いた。徳光は伊達源一郎と共に東方通信社生え抜きとして聯合の初代内信部長を務めたが、伊達と行動を共にして退社、その後大阪毎日新聞社会部長などを歴任した古野人脈の一人である。同盟庶務部長であった大川(幸之助)が副社長に、佐々木(健児)は取締役役に就いた。他に主筆は読売新聞出身の高木健夫、編集局長も読売

の佐々木金之助という顔ぶれで(中略)同盟の人脈で構成されたと云える(6)

里見の指摘はその通りであるが、編集局の中心的な構成員については、同盟人脈とは言えず、また読売新聞系というよりは徳光衣城を中心とした大阪毎日人脈というべきであろう。佐々木金之助・高木健夫・石川輝の「東亜新報の三羽ガラス」は徳光の大阪毎日時代の部下であり、一九三三年の「城戸事件」(大毎騒動)(7)の発生によって退社したグループなのである。

実は六年前の昭和八年十二月、大毎に新聞史上有名な「城戸事件」が起こり、大毎の社会部長だった徳光も城戸専務に従って退社した。

そこで社会部長だった佐々木金之助、高木健夫、石川輝の三人も、徳光部長とともに退社した。「無断職場放棄」だから、退職金も何ももらえなかった。

(中略)

そして、「徳光は」佐々木、高木、石川の三人の手を握り、「自分も必ずいつかはもう一旗あげる。そのときは三君は、どこで何をしていても、必ず馳せ参じてくれ」と言った。

以来、三人はその誓いを忘れず、読売新聞でいわば待機していたのだ(8)。

北京本社外交部長などを務めた関原利夫も「この三人(佐々木、高木、石川)はいずれも徳光氏の大阪毎日新聞社会部長時代の門下生で、戦前、大阪毎日を揺るがせた城戸元亮事件で、徳光氏が城戸氏と同社を去るに当たって、徳光氏とともに辞職し、のち三人は読売にも入社した間柄である」と語っている(9)。徳光を中心とした大阪毎日人脈と呼ぶ所以である。

では次に、徳光の大阪毎日人脈であり、「読売待機組」であった佐々木金之助・高木健夫・石川輝の三人について見てみよう。

佐々木金之助

一八九七年九月生まれ。国会図書館典拠データ検索・提供サービスによれば本名は佐々木金治(10)。東京毎夕新聞記者を皮切りに、大阪毎日新聞、読売新聞記者を経て東亜新報入社。戦後は読売新聞社に再び入社し、一九五二年の段階では編集局長兼整理部長(11)。一九五〇年に(株)読売巨人軍取締役。以後読売興業株式会社の常務取締役・専務取締役を歴任し、六三年から七五年の死去まで球団代表も務めた(12)。

自伝・評伝や年譜の類は管見の限りない。

高木健夫

一九〇五年二月一六日、福井県生まれ。ペンネーム高建子。

一歳のとき、中国・南京総領事館に勤務していた父親のもとに移り住む。一九〇八年帰国し、その後金沢・石巻・東京・横浜と転居する。一九二四年、一九歳の年に高木は北京に遊学し、中法大学の法文学堂に入学する。北京に遊学したことは、その後の高木に重大な影響を与え、高木は生涯中国に関わることになる。「北京——北京はわたしの人生を決定した」(13)。

高木は幼いころから友人向けに新聞や回覧雑誌を発行したり、新聞に投書を書きつたりしていた。一九二五年一月、投稿した「北京漫記」が『時事新報』に連載され、「いよいよ新聞記者になるための足がかりをつけようとする」ようになった(14)。一九二七年に帰国し、国民新聞社に入社、以後読売新聞社(一九三〇—三二年)、大阪毎日新聞社(一九三一—三三年)、二六新報社(一九三四年)、国民新聞社復帰(一九三四—三五年)と新聞社を渡り歩く。

国民新聞社に復帰して勤めていた時期、ラジオというメディアの進展に「活字ジャーナリズムの行きづまりを感じていた」高木に、「満州で新聞をやらなにか」という誘いの声が岡田益吉からあった(『新聞記者一代』一三五頁)。誘いに乗った高木は一九三五年、満洲国の首都新京(長春)に渡り、大新京日報の外交部長となる。その後、読売新聞新京支局長(一九三五年)、東亜部長(一九三七年)、北京特派員(一九三八年)、南京支局長(一九三八年)を歴任している。一九三九年、帰国し、

読売新聞社を退社。北京で創刊された東亜新報の主筆となる。

戦後、国民政府中央宣伝部に接収された東亜新報は華北日報となり、高木も留用されて華北日報の日文版翻訳組長となった。一九四六年四月に引き揚げ、古巣の読売新聞社に入社、論説委員となり、読売ウィークリー編集部長、出版局次長、編集局次長、整理部長、東亜部長などを歴任、一九六九年に退職した。戦後は、中国、北朝鮮や東南アジア諸国などを歴訪して多くの書籍を出版、ライフワークとしての新聞小説史研究や読売新聞のコラム「編集手帳」を一七年間担当するなど、様々な面で活躍した。一九八一年死去。

まとまった自伝・伝記は管見の限りないが、回想的な著作が多数あり、年譜として『碧落 高木健夫遺墨集』(高木健夫遺墨集編纂委員会、一九八二年)所収の「高木健夫年譜」がある。また、蔵書は神奈川近代文学館に寄贈されており、目録も作成されている(『県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録7 高木健夫文庫目録』神奈川文学振興会、一九九二年)。なお、この項目については戸塚麻子・神谷昌史「高木健夫『北京百景』——『東亜新報』掲載時における題目一覧」『滋賀文教短期大学紀要』第一九号、二〇一七年)の高木についての記述を再構成した。

石川輝

一九〇四年四月、東京生まれ。ペンネームとして北原伸一郎がある。一九二九年慶應義塾大学経済学部卒業。国民新聞社からスタートし、大阪毎日、読売の記者を経て東亜新報に入社。戦後は時事新報社会部長・連絡部長、産業経済新聞社、共同通信などに在籍。一九八七年逝去。

慶應義塾大学在学中には慶應義塾拳闘倶楽部を創設し、ボクサーとして活躍。一九三二年には「第十回オリンピック大会にコーチとして参加した」(15)。戦後は産業経済新聞社運動部などに勤務しながら、ボクシングなどのスポーツ評論家として活動し、『週刊サンケイ』などに多くの記事を執筆した。著書のカバーなどで著者紹介によれば「日本のアマボクシング界の草分け。初代慶大ボクシング部の主将。大正一四年の第一回全日本学生選手権から四回連続フェザー級チャンピオン。昭和七年

のロス五輪の日本チーム・コーチ。現在日本アマボクシング連盟顧問」とある(16)。
自伝・評伝や年譜の類は管見の限りない。

次に高木富五郎・長谷川光太郎の二人の論説委員について見ておこう。

高木富五郎

一八九四年三月二十七日、北海道利尻生まれ。ペンネームに高木冷夢・冷夢庵がある。尋常高等小学校卒業後、地元利尻で働いていたが勉学への思い止み難く、上京して国民英学会(英語学校)を一九一一年卒業、権太での代用教員を経て、一九一三年に早稲田大学専門部政治経済科に入学している。学生時代には「熱心に『モルモン教会』へ通い、卒業後には『多摩川の流れに入ってバプテスマをうけ』(17)、讚美歌の翻訳も行っている。一九一六年読売新聞社に入社、その後アメリカ・ユタ州の日本語新聞ユタ日報の主筆兼編集長(一九二〇―一九二一年)、東方通信社ワシントン会議特派員(一九二一―一九二二年)を経て中外商業新報に入社する。政治部記者から始まり、整理部長、政治部長、編集局次長、外報部長、論説委員などを一九三三年まで歴任し、その間中国・満洲などに特派員として数度派遣される。三三年から四一年まで日本外交協会幹事。一九四一年二月に東亜新報に入社する。

戦後は一九四六年四月に帰国後、富士電業株式会社などの役員を兼務しつつ、日本外交協会幹事(一九五二―一九五九年)、自由党機関紙『自由党報』編集長(一九五三―一九五四年)を務める。また一九五〇年から五九年まで末日聖徒イエス・キリスト教会(モルモン教会)の機関誌『聖徒の道』編集長を務め、五九年の「隠退」後は娘とともに再び讚美歌を翻訳し、出版している(18)。一九七三年死去。

自伝として冷夢庵『我が生涯』(高木富五郎、一九六三年)があり、「履歴」も収められている。

長谷川光太郎

一八八八年一〇月、静岡生まれ。ペンネームにかぶと・たろうがある。名前の読

みは「こうたろう」と思われるが、のちに挙げる『別冊新聞研究』の聞き取り記録にのみ「みつたろう」とある。一九一四年早稲田大学商科卒業。伊勢新報主筆、鉄道時報から報知新聞調査部、その後萬朝報で経済部外交部長、編集局兼論説委員。一九二六年に国民新聞に入社し、編集主事、経済部長を務め、徳富蘇峰の退社にもない退社するが数か月後に復帰、事業部長、政治部長、経済部長、編集局次長、編集局長、主筆などを歴任し、一九三七年に退社。東京証券団主事などを務めつつ、「情報屋」となる(19)。一九四四年一月に東亜新報入社。北京本社論説委員、同年八月から一〇月まで華北報道協会に常務理事として出向、一〇月からは栗原一夫の後釜として天津支社に赴任し編集局長。その後山東支社長となり太原で敗戦を迎え、一九四六年五月引き揚げ。

戦後は日本証券新聞に入社し、七一年に常務を最後に引退。長年経済記者として活躍した経験から『兜町盛衰記』(全四巻、日本証券新聞社、一九五七・五八・五九、六七年)などの著作を残している。一九七八年逝去。

大学在学中から新聞雑誌に「雑文を売り込むことを覚えていた」長谷川は、卒業後も売文で生計を立てていたが「安いながらも、キチンと支払ってくれたのは、川崎克氏(秀二代議士巖父)の旬刊「自治新聞」ぐらいなものだ。早大政治科学生平井太郎君(江戸川乱歩)をはじめ知ったのは、同誌を印刷していた江戸川終点に近い関口水道町の印刷屋の校正室だ」と回想している(20)。江戸川乱歩にとつても川崎克は恩人であったようで、エッセイで何度も川崎のことを描いており、長谷川、乱歩、齋木政太郎の三人で『川崎克伝』(一九五六年、川崎克伝刊行会)の編纂も担当している(21)。

また、学生の頃には堺利彦のところに入出入りし、警察から「要注意人物」扱いされてきた社会主義者であった(22)。一九一八年には老社会に参加している(23)。

自伝として、長谷川光太郎『鉛筆かきで50年 わが新聞記者行脚』前後篇(新聞行脚五十年刊行会、一九六八年)があり、内川芳美・西田長寿・春原昭彦による聞き取りの記録として長谷川光太郎「飄々と新聞記者行脚」(『別冊新聞研究 聴きとりでつづる新聞史』第五号、一九七七年一〇月)がある。

最後に、済南支社の支社長・編集局長を務めた竹内順三郎、外交部長や天津支社編集局長を務めた栗原一夫のふたりについて見ておこう。

竹内順三郎

一八九八年、静岡生まれ。ペンネームは竹内始萬。一九二四年国民新聞社に入社し(24)、社会部記者、地方部長、学芸部長などを歴任、一九三三年まで勤める。国民新聞社の先輩記者であった布津純一(国民新聞では営業局長・総務局長)が社長だった啓成社に移り、釣り雑誌『水之趣味』を創刊する。一九三九年、国策新聞『蒙疆新聞』の編集長として大陸に赴くが、折り合いがつかなかったらしく、四二年に辞任。帰国の途につく際、かつて国民新聞時代の同僚であった高木健夫や石川輝に挨拶するため立ち寄った北京で徳光衣城に気に入られ、徳光は「竹内さんを東亜に迎えろ」と厳命した(25)。

戦後は佐藤垢石が創刊した『つり人』(一九四六年創刊)を一九五一年に引き継ぎ、つり人社社長となる。竹内始萬の名で釣り随筆も物した。一九七三年死去。

竹内始萬『行雲流水記(紀行編)』(つり人社・つり人ノベルズ、一九九二年)の解説(加藤須賀雄執筆)が竹内の生涯について詳しい。

栗原一夫

栗原一夫(一男)の生涯については、新聞記者になる前のアナキストとしての活動時期と、新聞記者になって以降とに大別できる。『日本アナキズム運動人名事典』(ばる出版、二〇〇四年)の「栗原一男」の項目(亀田博執筆)によると、一九〇三年三月一八日、埼玉生まれ。岩倉鉄道学校予科を卒業後、労働に従事。アナキスト朴烈に誘われ、一九二三年アナキストのサークル不逞社に参加。同年治安警察法違反で検挙される。免訴となった後、関東大震災の際に拘束された朴烈・金子文子の救援活動を行う。大逆罪で死刑判決を受けた金子の自伝原稿を預かる。金子は無期懲役に減刑されたが、獄中で縊死する。「文子は自伝の原稿をその添削についての

希望も添えて不逞社の仲間である栗原一男に渡していたので、栗原の手によって文子の死後五周年にあたる一九三二年七月に、『何が私をかうさせたか』が栗原の回想「忘れ得ぬ面影」を添えて春秋社から出版され(26)。

一九三二年に国民新聞に入社し、新聞記者としてのキャリアをスタートさせている。「昭和七年国民新聞社会部に入社したのが彼の新聞記者生活の始めであるが、当時の国民新聞編集局長御手洗辰雄氏の薫訓を受けたのがそもそも彼の今日、新聞記者として、一人前となった原因であらふ」(27)とある人物評で述べられている。その後読売新聞整理部、NHK報道部に勤務し、『東亜新報』創刊とともに参加する。北京本社の外交部長から、天津支社の編集局長となるが、一九四三年には「東亜新報社の立場で北支軍報道部が新設する企画報道班に参画」(28)、「毎晩、時事問題放送に名をかり、ラジオを通じて、宣伝の仕事を担当することとなった」(29)。なお、東亜新報時代の栗原については、同時代の記事でものちの関係者の回想でも、アナキストであった過去について触れたものは見当たらない。

戦後は新夕刊新聞社編集局長。一九六一年の著書では「現在は財団法人日本政治経済調査会理事」とある(30)。昭和維新連盟、日本及日本人社顧問、月刊ペン取締役、財団法人日本政治文化研究所常務理事など、三浦義一・西山広喜等の流れの「右翼」に位置づけられる(31)。一九八一年六月二日没。

本稿では、『東亜新報』の編集局関係者について、徳光衣城、佐々木金之助、高木健夫、石川輝、高木富五郎、長谷川光太郎、竹内順三郎、栗原一夫の八名の略歴などを取りまとめた。今回取り上げることができなかったが、安岡哲三(済南支社編集局長兼整理部長)、矢野干城(太原支社長兼編集局長)、岡本四郎(太原支社長兼編集局長)、玉井亮之丞(石門支社長兼編集局長)、西田一夫(徐州支社長兼編集局長)といった支社長・編集局長の役職にあった人々はもとより、関原利夫(北京本社外交部長、元京大人民戦線事件関係者)、早瀬譲(北京本社外交部次長等、歌人)、安藤達夫(天津支社総務兼整理部長)、長谷川宏(編集局整理部調査室等、美術・文化関係の記事等を執筆。北京の文学同人誌『燕京文学』同人)、中園英樹(北京本社

外交部記者。『燕京文学』同人であり、中藪英助のペンネームで小説を発表。戦後スパイ小説などのジャンルで活躍する) など、取り扱うべき関係者は多い。これらの人物については他日を期したい。

註

(1) 「大陸新聞の現勢」3 東亜新報『日本新聞報』一九四三年八月五日。
(2) 戸塚麻子・神谷昌史『東亜新報』の編集局・論説委員について―『東亜新報』研究のためのおぼえがき』『常葉大学教育学部紀要』第三九号、二〇一九年三月。なお、同論文に参考資料として『東亜新報』の創刊から第五四六号まで(一九三九年七月三日―四〇年一月三十一日)の『東亜新報』「論説」題目一覧を付している。本論文の参考資料『東亜新報』「論説」題目一覧(一九四一年一月一日―一九四二年一月三十一日)はその続篇である。

(3) 日本新聞聯合社は東方通信社と国際通信社が合併してできた通信社であり。電通と並んで二大通信社とされた。一九三三年には両者が合併して同盟通信社が設立された。

(4) 『新聞人・徳光衣城』所収の「徳光衣城略年譜」には京都日の出新聞編集局長とあるが、京都日日新聞の誤りと思われる。

(5) 東亜会編『東亜新報おぼえがき 戦中・華北の新聞記者の記録』(東亜会、一九八四年)

(6) 里見脩「同盟通信社の「戦時報道体制」―通信社と国家」『マス・コミュニケーション研究』第六六卷、二〇〇五年一月、五一頁。

(7) 「城戸事件」は本山彦一社長死去を受けて一旦は取締役会長に就任した城戸元亮が、跡目争いに敗れ「追い出」された事件のこと(「大毎騒動記 城戸元亮氏追出しの大芝居」『実業の世界』第三〇巻第二二号、一九三三年二月)。この事件について堤哲は、「編集主幹・城戸元亮は、社会部長に聯合通信(共同通信の前身)内信局長の徳光衣城(伊助)を据えた。徳光は東京紙の腕つき社会部記者を次々にスカウト、高木「健夫」らの移籍記者たちは「聯合艦隊」と呼ばれた。伝統ある大毎

社会部の生え抜き記者とは軋轢が生じる。「中略」／ところが「毎日新聞中興の祖」本山彦一社長が一九三二(昭和七)年二月三日死去。取締役会長に就任した城戸元亮は、一九三三(昭和八)年一月の臨時取締役会で解任されてしまうのだ。／「聯合艦隊」の記者たちは、徳光衣城社会部長とともに退社した。その数五九人と述べている。堤哲「伝説の鉄道記者たち―鉄道に物語を与えた人々」(交通新聞社新書、二〇一四年)二〇七―二〇八頁。

(8) 石川輝「東亜新報の思い出」『東亜新報おぼえがき』前掲、一〇―一一頁。また佐々木金之助も「毎日新聞のお家騒動で有名な故城戸元亮会長追い出し事件の余波。私たちは直接このお家騒動にかかわりはなかったのですが、徳光社会部長への義理立てから、部員十余名も毎日新聞をおん出たのです。」と書き記している。佐々木金之助「徳光さんをだました話」東亜会有志編『新聞人・徳光衣城』(東亜会有志、一九六九年)二九頁。

(9) 関原利夫「軍・政記者の北京七年―中国大陸の邦字紙始末記」松本重治責任編集『ジャーナリストの証言 昭和の戦争1 日中戦争』(講談社、一九八六年)七〇頁。

(10) <http://id.ndl.go.jp/auth/ndlna/00067365> (二〇一八年一〇月八日閲覧)

(11) 社団法人日本著作権協議会編『文化人名録(昭和二十七年版)―著作権の戸籍簿(第二版)』(社団法人日本著作権協議会、一九五二年)三三九頁。

(12) 読売巨人軍75年史編纂委員会編『読売巨人軍75年史 資料編』(読売巨人軍、二〇一〇年)所収の「読売巨人軍 歴代役員」「年表」参照。

(13) 高木健夫『高木健夫の新聞走馬灯』(地産出版、一九七八年)三二―三二五頁。

(14) 高木健夫『新聞記者一代』(講談社、一九六二年)一三頁。

(15) 『慶應義塾百年史』中巻(後)、(慶應義塾、一九六四年)二八四頁。なお石川は、オリンピック参加の際の記念品にまつわる思い出について、戦時の金属供出と絡めて書いたエッセイ「鋼」を送る」を『東亜新報』に掲載している(一九四三年九月二三日―二九日掲載)。

(16) 石川輝『今なぜか力道山―真相・最強不滅の空手チョップ』(リイド社、一九八三年)。

(17) 冷夢庵『我が生涯』(高木富五郎、一九六三年)二二―二三頁。

(18) ポール・シー・アンドラス編、高木富五郎・柳田聡子訳『讚美歌』(末日聖徒イエス・キリスト教会北部極東伝道部、一九六〇年)

(19) 長谷川は自伝の中でこの時期のことを、「新聞社をやめたときの淋しき、つまりニュースから遠ざかって行く淋しきは、新聞記者の経験を持たない人には判らないかも知れないが、私をはじめは隠れたニュース知りたさに情報局入りした旧友に接近し、絶えずその人と連絡を取ってきたが、いつの間にか、わたしをして「情報屋」根性に墮落させた。〔中略〕「彼奴の情報は天下一品」というようなあらぬ噂を立てられるようになった。それが戦争末期に内地を逃げ出して大陸へ渡る気持ちになった一因をなしたことも否定し難い。〔中略〕わたしとしては、過去の長い一生を通じての最も暗い期間だったともいえる」と述べている。長谷川光太郎『鉛筆か』(1950年) わが新聞記者行脚』後篇(新聞行脚五十年刊行会、一九六八年)一八六―一八七頁。

(20) 長谷川光太郎『鉛筆か』(1950年) わが新聞記者行脚』前篇、前掲、五頁。

(21) 乱歩によれば「実際の執筆者は長谷川光太郎君であった」。江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第二九巻 探偵小説四〇年(上)』(光文社文庫、二〇〇六年)五九二頁。

(22) 長谷川光太郎『鉛筆か』(1950年) 前篇、前掲、一一―二頁。同書の「環境・思想的悩み」と題する章では、社会主義への接近と、のちに「社会主義から自由主義へ転向」したことが語られており、別のエッセイでは「私は有楽町に売文社があった頃、よく遊びに行きました。高島〔素之〕君には何かと指導を受けましたが、その後大正八年に堺枯川、高島素之の両君が喧嘩して、売文社の同人も両派に離れて終わりました。私はどつちにもつかず、そのまゝその一派の人達と遠ざかったのですが」云々と書いている。長谷川光太郎『罷業破り』聞人会編『随筆 世界を描く五十人集』(立命館出版部、一九三五年)四五五頁。

(23) 満川亀太郎『三国干渉以後』(論創社、二〇〇四年)一七一頁。

(24) 石川輝は竹内の国民新聞入社を一九三三年としている。「東亜新報の幹部たち」『東亜新報おぼえがき』前掲、一六五頁。

(25) 石川輝「東亜新報の幹部たち」『東亜新報おぼえがき』前掲、一六四―一六五頁。

(26) 山田昭次「解説」金子文子『何が私をこうさせたか』(岩波文庫、二〇一七年)四一―四頁。

(27) 李白雲「人物短評 栗原一男」『北支那』第一〇巻第八号、一九四三年八月。

(28) 栗原一夫「信ずる先師」東亜会有志編『新聞人・徳光衣城』(東亜会有志、一九六九年)五三頁。

(29) 長谷川光太郎『鉛筆か』(1950年) わが新聞記者行脚』後篇、前掲、二二三頁。

(30) 栗原一夫・松山治郎『日本財界入門』(学風社、一九六一年)奥付著者紹介。

(31) 猪野健治『日本の右翼―その系譜と展望』(日新報道出版部、一九七三年)では栗原は三浦義一の「傘下」とされている。同書一二五頁。

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「日本占領下華北における日本語文学の様相に関する基礎的・発展的研究」(課題番号18K00335)(代表者・戸塚麻子)の研究成果の一部である。

国文学科教授・日本政治思想史

付表1 『東亜新報』編集局の変遷

	1939年8月 (*1)	1943年8月 (*2)	1944年6月 (*3)
徳光衣城	北京本社 社長・編集局長	北京本社 社長	北京本社 社長
佐々木金之助	北京本社 編集総務	北京本社 編集局長	北京本社 編集局長
高木健夫	北京本社 編集総務	北京本社 主筆	北京本社 主筆 天津支社 主筆 (兼) 太原支社 主筆 (兼)
石川輝	北京本社 編集総務	北京本社 編集総務	北京本社 編集総務
高木富五郎			北京本社 論説委員
長谷川光太郎			北京本社 論説委員
関原利夫	北京本社 外交部・經濟部		北京本社 外交部長
上野繁夫	北京本社 外交部		北京本社 外交部次長
大川幸之助		天津支社 支社長	天津支社 支社長
栗原一夫 (一男)	北京本社 外交部長	天津支社 編集総務	天津支社 編集局長
安藤達夫			天津支社 総務・整理部長
竹内順三郎		済南支社 編集局長	済南支社 支社長
安岡哲三	北京本社 整理部次長		済南支社 編集局長・整理部長
矢野干城			太原支社 支社長・編集局長
玉井亮之丞		石門支社 支社長・編集局長	石門支社 支社長
橋本喜代治			開封支社 支社長
出口善次	北京本社 整理部校正		開封支社 支社次長
小川晴彦		済南支社 支社長	
岡本四郎		太原支社 支社長・編集局長	
西田一夫		徐州支社 支社長・編集局長	
堀川善雄	北京本社 整理部長		
早瀬讓	北京本社 外交部次長		

本表は下記の資料から作成した。

*1 長岡忠一「北京に産れた統制紙 東亜新報一創刊の経緯と機構」『北支那』第6巻第8号、1939年8月

*2 「大陸新聞の現勢3 東亜新報」『日本新聞報』1943年8月5日

*3 「東亜新報社・社員名簿(昭和十九年六月一日現在)」東亜会編『東亜新報おぼえがき』東亜会、1984年

『東亜新報』 「論説」 題目一覧 (1941年1月1日-1942年12月31日)

凡例

一、以下は『東亜新報』に掲載された「論説」の 題目一覧である。上海図書館蔵のものを参照した。欠号や破損のため参照できなかったものは以下の通りである。1941年1月27日、同5月の全て、8月24日、10月14日、22-24日、1942年6月の全て、11月26日。

なお、号数は原紙表記のままとしたが、1941年10月13日は本来830号であるところ840号となっており、以後1942年12月31日までそのまま誤記が継続する。

一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字体に改めた。

一、サブタイトルの前後に記号がある場合は「—」に統一した。また、記号は前のみにあるものと前後のものがあったが、統一はせず、そのままとした。

一、ルビは()に入れてその語句の後ろに記した。

号数	年/月/日	曜日	朝夕	面	掲 載 記 事 名
547	1941/1/1	水	朝	1	二千六百一年の位置
548	1941/1/2	木	朝	1	新しき扉に立つ
549	1941/1/4	土	朝	1	軍人勅諭と吾等
550	1941/1/5	日	朝	1	官吏と会社員 官界の新体制成る
551	1941/1/6	月	朝	1	アメリカに忿る
552	1941/1/7	火	朝	1	枢軸外交の新生面
553	1941/1/8	水	朝	1	中国の科学建設
554	1941/1/9	木	朝	1	戦陣訓を生かせ
555	1941/1/10	金	朝	1	欧洲戦・春の話題
556	1941/1/11	土	朝	1	前線意識の検討
557	1941/1/12	日	朝	1	国共調整の前途
558	1941/1/13	月	朝	1	華北の資源調査
559	1941/1/14	火	朝	1	笑ひを与へる政治
560	1941/1/15	水	朝	1	四つの京を結ぶ
561	1941/1/16	木	朝	1	再開迫る翼賛議會
562	1941/1/17	金	朝	1	北京の春を謳ふ
563	1941/1/18	土	朝	1	大東亜の日本語
564	1941/1/19	日	朝	1	北京の民団長制
565	1941/1/20	月	朝	1	華北共産軍の行方
566	1941/1/21	火	朝	1	アメリカ狂想曲
567	1941/1/22	水	朝	1	皇道外交の睨み 松岡外相の演説
568	1941/1/23	木	朝	1	滅共工作の新段階
569	1941/1/24	金	朝	1	米国宣教師に告ぐ
570	1941/1/25	土	朝	1	翼賛と一体化と
571	1941/1/26	日	朝	1	東亜共栄の自覚
573	1941/1/28	火	朝	1	中日一家・春の頌
574	1941/1/29	水	朝	1	板挟みの民衆苦
575	1941/1/30	木	朝	1	お天道と新体制
576	1941/1/31	金	朝	1	聖戦“大地”に開く
577	1941/2/1	土	朝	1	新版“興亜奉公日”
578	1941/2/2	日	朝	1	一握りの御奉公
579	1941/2/3	月	朝	1	“国家聯合理論”論
580	1941/2/4	火	朝	1	獅子吼とその後
581	1941/2/5	水	朝	1	戦ひと共に在れ
582	1941/2/6	木	朝	1	佳節待つころ
583	1941/2/7	金	朝	1	翼賛論議の焦点
584	1941/2/8	土	朝	1	ヴィシーの明暗
585	1941/2/9	日	朝	1	生きてゐる戦陣訓
586	1941/2/10	月	朝	1	東亜共栄の外交
587	1941/2/11	火	朝	1	紀元の佳節にあたり聖戦の本義を思ふ

588	1941/2/12	水	朝	1	柴大人と日本人
589	1941/2/13	木	朝	1	彼女の生きる道—独仏関係の新展望
590	1941/2/14	金	朝	1	風雪のバルカン
591	1941/2/15	土	朝	1	追詰められる中共
592	1941/2/16	日	朝	1	沸る血の御奉公
593	1941/2/17	月	朝	1	反共抗日の詭弁
594	1941/2/18	火	朝	1	翼賛議会の変質
595	1941/2/19	水	朝	1	極東危機の製造元
596	1941/2/20	木	朝	1	平和への発議者
597	1941/2/21	金	朝	1	イギリス最後の日
598	1941/2/22	土	朝	1	日ソ国交の重点
599	1941/2/23	日	朝	1	敵性仏印の周辺
600	1941/2/24	月	朝	1	処女の如く終るか
601	1941/2/25	火	朝	1	新四軍事件其後
602	1941/2/26	水	朝	1	翼賛会の新発足
603	1941/2/27	木	朝	1	独伊肝胆相照す
604	1941/2/28	金	朝	1	言葉の魔法使ひ
605	1941/3/1	土	朝	1	新民会創立三周年
606	1941/3/2	日	朝	1	援蒋算術の答案
607	1941/3/3	月	朝	1	盟邦またひとつ
608	1941/3/4	火	朝	1	仏印当局に望む
609	1941/3/5	水	朝	1	重慶の反共性格
610	1941/3/6	木	朝	1	デマ・ほんま・ルーマー
611	1941/3/7	金	朝	1	民族性格の把握
612	1941/3/8	土	朝	1	東亜外交の勝利
613	1941/3/9	日	朝	1	或る日の雑感
614	1941/3/10	月	朝	1	陸軍記念日に思ふ
615	1941/3/11	火	朝	1	ほんたうの建設
616	1941/3/12	水	朝	1	共栄圏の一里塚
617	1941/3/13	木	朝	1	松岡外相の渡欧
618	1941/3/14	金	朝	1	重慶の敵は何れぞ
619	1941/3/15	土	朝	1	晋南作戦の意義
620	1941/3/16	日	朝	1	イギリスの悲鳴
621	1941/3/17	月	朝	1	三つの大陸風景
622	1941/3/18	火	朝	1	近東と枢軸国家
623	1941/3/19	水	朝	1	満洲国の再認識
624	1941/3/20	木	朝	1	道ばたのほこり
625	1941/3/21	金	朝	1	治安強化運動
626	1941/3/22	土	朝	1	安居楽業の本質
627	1941/3/23	日	朝	1	協力を準備せよ
628	1941/3/24	月	朝	1	"舌"より挺身実践
629	1941/3/25	火	朝	1	新中国と治安軍
630	1941/3/26	水	朝	1	沸騰する自衛力
631	1941/3/27	木	朝	1	悲しまざる黄河
632	1941/3/28	金	朝	1	保甲制度の新生
633	1941/3/29	土	朝	1	国府還都一周年
634	1941/3/30	日	朝	1	華北的政治性格 華北政務委員会一周年
635	1941/3/31	月	朝	1	保衛華北の筋金
636	1941/4/1	火	朝	1	現地の興亜奉公
637	1941/4/2	水	朝	1	組織には組織で
638	1941/4/3	木	朝	1	敵前に培ふ自衛力
639	1941/4/4	金	朝	1	中国治安の今昔
640	1941/4/5	土	朝	1	自動車路線の躍進
641	1941/4/6	日	朝	1	新民主主義の仮面
642	1941/4/7	月	朝	1	治安強化の成果

643	1941/4/9	水	朝	1	崩れる寄木細工(ユー・ゴスラヴィア)
644	1941/4/10	木	朝	1	ソ聯とバルカン
645	1941/4/11	金	朝	1	滅共華北の前進
646	1941/4/12	土	朝	1	晋冀察辺区作戦
647	1941/4/13	日	朝	1	隣組・県人会・其他
648	1941/4/14	月	朝	1	ギヴ・エンド・ギヴ
649	1941/4/15	火	朝	1	新なる日ソ関係
650	1941/4/16	水	朝	1	日ソ条約と華北
651	1941/4/17	木	朝	1	ユーゴ遂に降服
652	1941/4/18	金	朝	1	郷村自衛力の育成
653	1941/4/19	土	朝	1	戦時ドイツの食糧
654	1941/4/20	日	朝	1	訓練された旅客
655	1941/4/21	月	朝	1	松岡外相を迎へて 日ソ外交秘話と華北の剿共
656	1941/4/22	火	朝	1	事変と世界情勢
657	1941/4/23	水	朝	1	満洲国の再登場
658	1941/4/24	木	朝	1	アメリカの罷免
659	1941/4/25	金	朝	1	バルカン新秩序
660	1941/4/26	土	朝	1	近東戦局の発展
661	1941/4/27	日	朝	1	世界平和と世界観
662	1941/4/28	月	朝	1	どうするトルコ
663	1941/4/29	火	朝	1	天長節万歳
664	1941/4/30	水	朝	1	我等の和平攻勢
696	1941/6/1	日	朝	1	英本土への実験台
697	1941/6/2	月	朝	1	北京の風俗時評
698	1941/6/3	火	朝	1	冀東作戦の展開
699	1941/6/4	水	朝	1	民族操縦の態度
700	1941/6/5	木	朝	1	栄養不良の抗戦
701	1941/6/6	金	朝	1	“閑談”と“会談”と…
702	1941/6/7	土	朝	1	中原会戦第二期
703	1941/6/8	日	朝	1	大陸のお嬢さん
704	1941/6/9	月	朝	1	西アジアの戦雲
705	1941/6/10	火	朝	1	闘水の時季近し
706	1941/6/11	水	朝	1	苦力(クーリー)と文化生活
707	1941/6/12	木	朝	1	銃後は日本晴れ
708	1941/6/13	金	朝	1	興亜運動の統一
709	1941/6/14	土	朝	1	政戦一如の具象
710	1941/6/15	日	朝	1	新民会と文化性
711	1941/6/16	月	朝	1	汪主席訪日第一歩
712	1941/6/17	火	朝	1	アジアの東と西
713	1941/6/18	水	朝	1	独ソは衝突するか
714	1941/6/19	木	朝	1	日華親善“大蔵経”
715	1941/6/20	金	朝	1	共栄圏の新段階
716	1941/6/21	土	朝	1	北支軍合同慰霊祭
717	1941/6/22	日	朝	1	日本人の語学力
718	1941/6/23	月	朝	1	冀中の共匪剿滅
719	1941/6/24	火	朝	1	夏防運動の基底
720	1941/6/25	水	朝	1	花園を築く言葉
721	1941/6/26	木	朝	1	揺がざる大東亜
722	1941/6/27	金	朝	1	華北治安新段階
723	1941/6/28	土	朝	1	国府強化の方向
724	1941/6/29	日	朝	1	信義の結晶三億円
725	1941/6/30	月	朝	1	戦時独逸の余裕
726	1941/7/1	火	朝	1	興亜運動の展開
727	1941/7/2	水	朝	1	五ヶ国の国府承認
728	1941/7/3	木	朝	1	中原会戦・『因』と『果』

729	1941/7/4	金	朝	1	日華隣組的精神
730	1941/7/5	土	朝	1	行方不明の聖戦
731	1941/7/6	日	朝	1	生きてゐる建設
732	1941/7/7	月	朝	1	事変第五年の性格
733	1941/7/8	火	朝	1	日本人起つべし 第二次治安強化運動の意義
734	1941/7/9	水	朝	1	多田最高指揮官
735	1941/7/10	木	朝	1	興亜の敵は誰か？
736	1941/7/11	金	朝	1	北京の人口動態
737	1941/7/12	土	朝	1	光榮ある協力へ
738	1941/7/13	日	朝	1	これぞ興亜風景
739	1941/7/14	月	朝	1	思想戦とは何か？
740	1941/7/15	火	朝	1	わが生活の周囲
741	1941/7/16	水	朝	1	英ソ何を嚙む？
742	1941/7/17	木	朝	1	華北を生かす条約
743	1941/7/18	金	朝	1	近衛内閣の脱皮
744	1941/7/19	土	朝	1	治安寄生感を排す
745	1941/7/20	日	朝	1	第三次近衛内閣
746	1941/7/21	月	朝	1	先づ内部を固めよ
747	1941/7/22	火	朝	1	国共相剋再発す
748	1941/7/23	水	朝	1	日華隣組の提携
749	1941/7/24	木	朝	1	反共運動の展望
750	1941/7/25	金	朝	1	交通地獄を救へ
751	1941/7/26	土	朝	1	楽しむといふ事
752	1941/7/27	日	朝	1	ABCの夢摧く
753	1941/7/28	月	朝	1	臨戦地区の戦時体制
754	1941/7/29	火	朝	1	資産凍結と華北
755	1941/7/30	水	朝	1	共栄圏への進駐
756	1941/7/31	木	朝	1	民意は武装する
757	1941/8/1	金	朝	1	独善を追放せよ
758	1941/8/2	土	朝	1	鍛錬はたのしく
759	1941/8/3	日	朝	1	優越感について
760	1941/8/4	月	朝	1	吾等一ヶ月の戦績
761	1941/8/5	火	朝	1	どつちが本家か
762	1941/8/6	水	朝	1	必勝の信念昂る
763	1941/8/7	木	朝	1	思想戦の完遂へ
764	1941/8/8	金	朝	1	治強運動の人柱
765	1941/8/9	土	朝	1	模範地区とは何か
766	1941/8/10	日	朝	1	風俗と民族の意識
767	1941/8/11	月	朝	1	中共の矛盾を衝く
768	1941/8/12	火	朝	1	交通標語は訓ふ
769	1941/8/13	水	朝	1	武器なき武力
770	1941/8/14	木	朝	1	犠牲に感謝しよう
771	1941/8/15	金	朝	1	タイを狙ふAB
772	1941/8/16	土	朝	1	英米の共同宣言
773	1941/8/17	日	朝	1	辺区の経済的苦悶
774	1941/8/18	月	朝	1	中共の軍事的弱点
775	1941/8/19	火	朝	1	思想戦標語を読む
776	1941/8/20	水	朝	1	皇軍作戦と自衛団
777	1941/8/21	木	朝	1	政治力の結集へ
778	1941/8/22	金	朝	1	独ソ戦とアジア
779	1941/8/23	土	朝	1	中国を逆流させる者
781	1941/8/25	月	朝	1	彼等を何を遊撃する？
782	1941/8/26	火	朝	1	赤区覆滅新作戦
783	1941/8/27	水	朝	1	防諜と現地意識
784	1941/8/28	木	朝	1	思想戦体制の確立

785	1941/8/29	金	朝	1	海賊的空巢狙ひ
786	1941/8/30	土	朝	1	防共華北の性格
787	1941/8/31	日	朝	1	ソ聯の抗戦目的
788	1941/9/1	月	朝	1	合同慰霊祭の提唱
789	1941/9/2	火	朝	1	独ソ戦の深刻化
790	1941/9/3	水	朝	1	縁の下の一青年
791	1941/9/4	木	朝	1	道義東亜の再建設
792	1941/9/5	金	朝	1	現地の銃後から
793	1941/9/6	土	朝	1	清郷と治安強化
794	1941/9/7	日	朝	1	現地の国民教育
795	1941/9/8	月	朝	1	反共運動の総合効果
796	1941/9/9	火	朝	1	独米相闘ふか？
797	1941/9/10	水	朝	1	光明は明日にあり
798	1941/9/11	木	朝	1	模範地区の公理
799	1941/9/12	金	朝	1	知ると知られる
800	1941/9/13	土	朝	1	帰順する八路軍
801	1941/9/14	日	朝	1	防衛水域の悪夢
802	1941/9/15	月	朝	1	内を省みるの秋
803	1941/9/16	火	朝	1	遅ましき哉・銃後
804	1941/9/17	水	朝	1	防衛水域の算術
805	1941/9/18	木	朝	1	秋寂し抗戦陣営
806	1941/9/19	金	朝	1	錬成の秋に憶ふ
807	1941/9/20	土	朝	1	華工問題の断面
808	1941/9/21	日	朝	1	現地の商工業者
809	1941/9/22	月	朝	1	山東赤区の覆滅
810	1941/9/23	火	朝	1	辺区は消えるか
811	1941/9/24	水	朝	1	勝鬨高し洞庭湖
812	1941/9/25	木	朝	1	ソ聯工業力の危機
813	1941/9/26	金	朝	1	東亜共栄外交圏
814	1941/9/27	土	朝	1	“鉄の枢軸”は闘ふ
815	1941/9/28	日	朝	1	三国同盟の将来
816	1941/9/29	月	朝	1	薛岳(せつがく)敗(やぶ)れたり矣
817	1941/9/30	火	朝	1	満華の共同剿共
818	1941/10/1	水	朝	1	政経一体への滑油 天津・「東亜新報」けふ発刊
819	1941/10/2	木	朝	1	中原に有終の美
820	1941/10/3	金	朝	1	鉄騎黄河を渡る
821	1941/10/4	土	朝	1	世界新秩序合戦
822	1941/10/5	日	朝	1	鄭州攻略の影響
823	1941/10/6	月	朝	1	独ソ戦勝負あり
824	1941/10/7	火	朝	1	中国人と支那人
825	1941/10/8	水	朝	1	外国租界の秋風
826	1941/10/9	木	朝	1	新中国の双十節
827	1941/10/10	金	朝	1	怡怡たり双十節
828	1941/10/11	土	朝	1	内政・内交・外交
829	1941/10/12	日	朝	1	華北の生活文化
840	1941/10/13	月	朝	1	さよならガソリン
842	1941/10/15	水	朝	1	英霊、靖国に還る
843	1941/10/16	木	朝	1	“全聯”に寄せて
844	1941/10/17	土	朝	1	満蒙国境空高く
845	1941/10/19	日	朝	1	戦ひ更に新なり
846	1941/10/20	月	朝	1	新蔵相への期待
847	1941/10/21	火	朝	1	華北稔り豊かに
851	1941/10/25	土	朝	1	新民会への愛情
852	1941/10/26	日	朝	1	イソツブ新秩序
853	1941/10/27	月	朝	1	ソ聯の援蔣中止

854	1941/10/28	火	朝	1	戦ふ臨時議会
855	1941/10/29	水	朝	1	日華貿易の前進
856	1941/10/30	木	朝	1	用語はやさしく
857	1941/10/31	金	朝	1	愚かなる視察者
858	1941/11/1	土	朝	1	治安強化運動論
859	1941/11/2	日	朝	1	華北は何を獲たか 既往における治安強化運動の強化
860	1941/11/3	月	朝	1	明治節いやさか
861	1941/11/4	火	朝	1	金子大尉の遺書
862	1941/11/5	水	朝	1	治安工作の前進
863	1941/11/6	木	朝	1	敵性国アメリカ
864	1941/11/7	金	朝	1	民生安定の基礎
865	1941/11/8	土	朝	1	“滅共愛民”への道
866	1941/11/9	日	朝	1	智利の友に寄す
867	1941/11/10	月	朝	1	『県』＝華北中核体
868	1941/11/11	火	朝	1	魯南赤区の破催
869	1941/11/12	水	朝	1	農村実体の把握
870	1941/11/13	木	朝	1	中亜横断枢軸路
871	1941/11/14	金	朝	1	『保甲』無力なりや
872	1941/11/15	土	朝	1	臨時議会の決心
873	1941/11/16	日	朝	1	“私”は最大の敵だ
874	1941/11/17	月	朝	1	治安工作の重点
875	1941/11/18	火	朝	1	東亜自存の決意
876	1941/11/19	水	朝	1	華北経済人の役割
877	1941/11/20	木	朝	1	決意体制確立す
878	1941/11/21	金	朝	1	無気力な指導者
879	1941/11/22	土	朝	1	臨時議会の成果
880	1941/11/23	日	朝	1	悶えるアメリカ
881	1941/11/24	月	朝	1	有機的活動に入れ
882	1941/11/25	火	朝	1	日米交渉の前途
883	1941/11/26	水	朝	1	経済封鎖の目標
884	1941/11/27	木	朝	1	防共国家再締盟
885	1941/11/28	金	朝	1	重点都市の自覚
886	1941/11/29	土	朝	1	リビアに足掻く
887	1941/11/30	日	朝	1	日満華締約一周年
888	1941/12/1	月	朝	1	世界情勢と華北
889	1941/12/2	火	朝	1	日米交渉の段階
890	1941/12/3	水	朝	1	大東亜を侵す者
891	1941/12/4	木	朝	1	英米葬送行進曲
892	1941/12/5	金	朝	1	新民会は推進体
893	1941/12/6	土	朝	1	現地婦人の翼賛
894	1941/12/7	日	朝	1	アメリカの戦略
895	1941/12/8	月	朝	1	最近の重慶政情
896	1941/12/9	火	朝	1	東亜解放戦と華北
897	1941/12/10	水	朝	1	太平洋艦隊破砕
898	1941/12/11	木	朝	1	太平洋とアジア
899	1941/12/12	金	朝	1	世界戦と剿共華北
900	1941/12/13	土	朝	1	独伊の対米参戦
901	1941/12/14	日	朝	1	参戦華北の方向
902	1941/12/15	月	朝	1	比島、香港の攻略
903	1941/12/16	火	朝	1	参戦と華北治安
904	1941/12/17	水	朝	1	華北の必勝体制
905	1941/12/18	木	朝	1	大アジアの宣言
906	1941/12/19	金	朝	1	参戦華北の政治
907	1941/12/20	土	朝	1	皇風、大陸に遍し
908	1941/12/21	日	朝	1	大東亜経済戦争

909	1941/12/22	月	朝	1	吾等の戦争任務
910	1941/12/23	火	朝	1	解放アジアの道
911	1941/12/24	水	朝	1	アジアは一なり
912	1941/12/25	木	朝	1	心さつぱりお正月
913	1941/12/26	金	朝	1	香港攻略の意義
914	1941/12/27	土	朝	1	参戦華北のすがた
915	1941/12/28	日	朝	1	新生香港の使命
916	1941/12/29	月	朝	1	銃後盤石の固め
917	1941/12/30	火	朝	1	大東亜の円経済
918	1941/12/31	水	朝	1	“決戦”より“必勝”へ
919	1942/1/1	木	朝	1	新しきアジアを創る
920	1942/1/2	金	朝	1	米英・策なき焦燥
921	1942/1/3	土	朝	1	東亜解放の構想
922	1942/1/4	日	朝	1	東亜より米国追放 マニラ陥落の意義
923	1942/1/5	月	朝	1	大和魂まのあたり ハワイ海戦を読みて
924	1942/1/6	火	朝	1	戦略地位逆転す
925	1942/1/7	水	朝	1	重光大使を迎ふ
926	1942/1/8	木	朝	1	けふ大詔奉戴日
927	1942/1/9	金	朝	1	完勝へ銃後一丸
928	1942/1/10	土	朝	1	『援蔣』不連続線
929	1942/1/11	日	朝	1	長期戦を建設せん
930	1942/1/12	月	朝	1	馬來の運命決す
931	1942/1/13	火	朝	1	中共の対蔣攻勢
932	1942/1/14	水	朝	1	神速、蘭印を制圧
933	1942/1/15	木	朝	1	華北官場新体制
934	1942/1/16	金	朝	1	汎米会議の疑問
935	1942/1/17	土	朝	1	華北の参戦施策 省・市長会議の収穫
936	1942/1/18	日	朝	1	新民会の新機構
937	1942/1/19	月	朝	1	東亜の自給自足戦
938	1942/1/20	火	朝	1	英米撃滅枢軸陣
939	1942/1/21	水	朝	1	華北の参戦経済
940	1942/1/22	木	朝	1	再開議会の任務
941	1942/1/23	金	朝	1	大東亜施政方針
942	1942/1/24	土	朝	1	社会事業の再出発
943	1942/1/25	日	朝	1	枢軸東西に相結ぶ
944	1942/1/26	月	朝	1	必殺の剣を擬す 重慶政権の反省を促して
945	1942/1/27	火	朝	1	デモクラ仲間割れ
946	1942/1/28	水	朝	1	泰国の対米英宣戦
947	1942/1/29	木	朝	1	参戦華北の献金熱
948	1942/1/30	金	朝	1	華北の食糧対策
949	1942/1/31	土	朝	1	大東亜戦争の中心
950	1942/2/1	日	朝	1	チャーチルの欺瞞
951	1942/2/2	月	朝	1	英帝国の断末魔 星湾対岸を確保す
952	1942/2/3	火	朝	1	戦争は建設段階へ
953	1942/2/4	水	朝	1	技術日本の出動
954	1942/2/5	木	朝	1	経済圏の新構想
955	1942/2/6	金	朝	1	肅清山西共産軍
956	1942/2/7	土	朝	1	蘭印艦隊壊滅す
957	1942/2/8	日	朝	1	第二回大詔奉戴日
958	1942/2/9	月	朝	1	ビルマ民族の嚮背
959	1942/2/10	火	朝	1	南方熱に自省せよ
960	1942/2/11	水	朝	1	紀元の佳節を迎ふ
961	1942/2/12	木	朝	1	銃後赤誠の結晶
962	1942/2/13	金	朝	1	戦時予算成立す
963	1942/2/14	土	朝	1	英国末期の暴虐

964	1942/2/15	日	朝	1	東亜文化の大道
965	1942/2/16	月	朝	1	シンガポール攻略
966	1942/2/17	火	朝	1	抗日政権に訓ふ
967	1942/2/18	水	朝	1	拳国躍動への日
968	1942/2/19	木	朝	1	租界行政の移管
969	1942/2/20	金	朝	1	大東亜建設審議会
970	1942/2/21	土	朝	1	赤道以南の戦場
971	1942/2/22	日	朝	1	日満華食糧自給
972	1942/2/23	月	朝	1	石津運河の価値
973	1942/2/24	火	朝	1	燦たる敢闘精神
974	1942/2/25	水	朝	1	華北新聞記者大会
975	1942/2/26	木	朝	1	東方道義光あり 軍管理工場の返還
976	1942/2/27	金	朝	1	最初の戦時債券
977	1942/2/28	土	朝	1	苦悩する英内閣
978	1942/3/1	日	朝	1	米国へ休当り戦
979	1942/3/2	月	朝	1	南溟に敵影なし
980	1942/3/3	火	朝	1	華北の緑化運動
981	1942/3/4	水	朝	1	帰れ王道国家に
982	1942/3/5	木	朝	1	回教民族への照明
983	1942/3/6	金	朝	1	巨象目覚めんとす
984	1942/3/7	土	朝	1	陸軍記念日近し
985	1942/3/8	日	朝	1	感激を新にして 第三回大詔奉戴日を迎ふ
986	1942/3/9	月	朝	1	満華連絡協議会
987	1942/3/10	火	朝	1	東亜解放の第一戦 第三十七回陸軍記念日
988	1942/3/11	水	朝	1	蘭印、共栄圏に服す
989	1942/3/12	木	朝	1	華北の戦捷祝賀
990	1942/3/13	金	朝	1	戦捷の決意を聴く
991	1942/3/14	土	朝	1	東亜局勢とソ聯
992	1942/3/15	日	朝	1	蘭貢・重慶・延安
993	1942/3/16	月	朝	1	“喰べる華北”考
994	1942/3/17	火	朝	1	建設戦の一貫性
995	1942/3/18	水	朝	1	現地翼賛の本質
996	1942/3/19	木	朝	1	翼賛総選挙を観る
997	1942/3/20	金	朝	1	華北建設快速調
998	1942/3/21	土	朝	1	現地の「防諜」警戒
999	1942/3/22	日	朝	1	新秩序攻勢の春
1000	1942/3/23	月	朝	1	民族の立体的発展
1001	1942/3/24	火	朝	1	東亜解放の敵・中共
1002	1942/3/25	水	朝	1	竦(すく)む濠洲へ与ふ
1003	1942/3/26	木	朝	1	新民族主義出でよ
1004	1942/3/27	金	朝	1	旺盛なる自活精神
1005	1942/3/28	土	朝	1	天津新しく誕生す けふ英租界の行政移管式
1006	1942/3/29	日	朝	1	還都二ケ年の国府
1007	1942/3/30	月	朝	1	華北政務委員会成立二周年 政治力は滲透せり
1008	1942/3/31	火	朝	1	第四次治安強化 運動とその目標
1009	1942/4/1	水	朝	1	陸海の建設作戦
1010	1942/4/2	木	朝	1	東亜共栄圏の実力
1011	1942/4/3	金	朝	1	インド解放の嵐
1012	1942/4/5	日	朝	1	増産謳ふ清明節
1013	1942/4/6	月	朝	1	大東亜圏の思想戦
1014	1942/4/7	火	朝	1	変貌する南洋華僑
1015	1942/4/8	水	朝	1	砲声インドに轟く
1016	1942/4/9	木	朝	1	自励運動に寄す
1017	1942/4/10	金	朝	1	知識階級の責務
1018	1942/4/11	土	朝	1	新らしき国民生活

1019	1942/4/12	日	朝	1	明朗比島の扉開く
1020	1942/4/13	月	朝	1	郷村自衛と剿共戦
1021	1942/4/14	火	朝	1	英国の制海権潰ゆ
1022	1942/4/15	水	朝	1	米国今や断末魔
1023	1942/4/16	木	朝	1	華北交通三周年
1024	1942/4/17	金	朝	1	一面増産、一面勤儉
1025	1942/4/18	土	朝	1	おゝ、大東亜博覧会
1026	1942/4/19	日	朝	1	建設部門の推敲
1027	1942/4/20	月	朝	1	“東亜解放”と華北
1028	1942/4/21	火	朝	1	祖国を護るの誓ひ
1029	1942/4/22	水	朝	1	総選挙と新政治
1030	1942/4/23	木	朝	1	冀中平野に黎明来
1031	1942/4/24	金	朝	1	剿共と“東亜解放”
1032	1942/4/25	土	朝	1	靖国の英霊に捧ぐ
1033	1942/4/26	日	朝	1	和平陣営拡大さる
1034	1942/4/27	月	朝	1	北支軍合同慰霊祭に当り 治安の強化を誓ふ
1035	1942/4/28	火	朝	1	治強運動と日本人
1036	1942/4/29	水	朝	1	稜威遍し大東亜 万歳 天長節万歳
1037	1942/4/30	木	朝	1	独総統の準備成る
1038	1942/5/1	金	朝	1	華北建設戦の両輪 作戦と治安強化運動
1039	1942/5/2	土	朝	1	持たざる国“米国”
1040	1942/5/3	日	朝	1	ビルマ喪失の重慶
1041	1942/5/4	月	朝	1	増産めざす春耕期
1042	1942/5/5	火	朝	1	翼賛総選挙の教訓
1043	1942/5/6	水	朝	1	濠洲、米領と化す
1044	1942/5/7	木	朝	1	中原会戦後一年
1045	1942/5/8	金	朝	1	東亜解放の真姿
1046	1942/5/9	土	朝	1	懸軍万里雲南へ！
1047	1942/5/10	日	朝	1	珊瑚海の大戦果
1048	1942/5/11	月	朝	1	東亜解放の教育
1049	1942/5/12	火	朝	1	現地の健民運動
1050	1942/5/13	水	朝	1	満華紐帯の強化
1051	1942/5/14	木	朝	1	冀中軍区剿滅作戦 その構想と重点
1052	1942/5/15	金	朝	1	増産、増送及び勤儉
1053	1942/5/16	土	朝	1	歐洲戦局夏の陣
1054	1942/5/17	日	朝	1	赫たり矣、緬甸戡定
1055	1942/5/18	月	朝	1	剿共自衛の軸心
1056	1942/5/19	火	朝	1	無敵潜水艦の偉業
1057	1942/5/20	水	朝	1	半島同胞に徴兵制
1058	1942/5/21	木	朝	1	治安圏は拡大す 北支軍の肅正作戦
1059	1942/5/22	金	朝	1	対共攻勢の驀進
1060	1942/5/23	土	朝	1	戦時防諜の枢義
1061	1942/5/24	日	朝	1	爾是中国人麼
1062	1942/5/25	月	朝	1	東亜解放と中共
1063	1942/5/26	火	朝	1	翼賛政治会の発足
1064	1942/5/27	水	朝	1	Z旗永久に燦たり
1065	1942/5/28	木	朝	1	見敵必殺の戦果
1066	1942/5/29	金	朝	1	治安機構の拡充
1067	1942/5/30	土	朝	1	臨時議会の収穫
1068	1942/5/31	日	朝	1	同歎共苦の誓ひ 国府の訪日大使特派
1099	1942/7/1	水	朝	1	“興亜”を生活せよ 興亜記念週間第一日
1100	1942/7/2	木	朝	1	興亜の力華北の力 興亜記念週間第二日
1101	1942/7/3	金	朝	1	現地生活の指標 興亜記念週間第三日
1102	1942/7/4	土	朝	1	東亜解放の方向 興亜記念週間第四日
1103	1942/7/5	日	朝	1	治安華北の本質 興亜記念週間第五日

1104	1942/7/6	月	朝	1	生活構想への出発 興亜記念週間第六日
1105	1942/7/7	火	朝	1	盧溝橋の晨に立ちて
1106	1942/7/8	水	朝	1	アジア確立の大道 興亜記念週間第八日
1107	1942/7/9	木	朝	1	蔣共打倒の決意
1108	1942/7/10	金	朝	1	タイの国府承認
1109	1942/7/11	土	朝	1	“闇”に訓へられる
1110	1942/7/12	日	朝	1	起て、中・西亜民族
1111	1942/7/13	月	朝	1	至誠以て発憤せよ
1112	1942/7/14	火	朝	1	物価対策の基底
1113	1942/7/15	水	朝	1	南方華僑の転生
1114	1942/7/16	木	朝	1	独ソ戦第二段階
1115	1942/7/17	金	朝	1	揺ぐラテン米諸邦
1116	1942/7/18	土	朝	1	徐良中佐の手記
1117	1942/7/19	日	朝	1	低金利政策の要望
1118	1942/7/20	月	朝	1	共栄圏の海と陸 “海の記念日”に当りて
1119	1942/7/21	火	朝	1	逼迫せる印度情勢
1120	1942/7/22	水	朝	1	日ソ離間の謀略
1121	1942/7/23	木	朝	1	数と数との戦争
1122	1942/7/24	金	朝	1	現地防諜の再検討
1123	1942/7/25	土	朝	1	西亜民族自覚の嵐
1124	1942/7/26	日	朝	1	空の軍神加藤少将
1125	1942/7/27	月	朝	1	大東亜建設の方策
1126	1942/7/28	火	朝	1	棄てられし濠洲
1127	1942/7/29	水	朝	1	啾々、重慶文化界
1128	1942/7/30	木	朝	1	南部赤軍の危局
1129	1942/7/31	金	朝	1	再度の借款供与
1130	1942/8/1	土	朝	1	現地の翼賛運動
1131	1942/8/2	日	朝	1	東亜的な日本語
1132	1942/8/3	月	朝	1	南方諸域の新生活
1133	1942/8/4	火	朝	1	重慶の西北攻勢
1134	1942/8/5	水	朝	1	厳肅なる物価対策
1135	1942/8/6	木	朝	1	農業華北の前進
1136	1942/8/7	金	朝	1	防諜と民族意識
1137	1942/8/8	土	朝	1	新現地型日本人
1138	1942/8/9	日	朝	1	東太平洋作戦
1139	1942/8/10	月	朝	1	最近の蔣共情勢
1140	1942/8/11	火	朝	1	米英聯合艦隊撃滅
1141	1942/8/12	水	朝	1	嵐はつひに来る
1142	1942/8/13	木	朝	1	交換船の教訓
1143	1942/8/14	金	朝	1	男女総動員の必然
1144	1942/8/15	土	朝	1	重慶の対印態度
1145	1942/8/16	日	朝	1	良き日本人の衣
1146	1942/8/17	月	朝	1	物価対策を再論す
1147	1942/8/18	火	朝	1	我等飽迄勝たう
1148	1942/8/19	水	朝	1	新国民運動の初動
1149	1942/8/20	木	朝	1	独ソ和平節の網膜
1150	1942/8/21	金	朝	1	大東亜の留学生
1151	1942/8/22	土	朝	1	インドの難を翦れ
1152	1942/8/23	日	朝	1	西北回教軍の将来
1153	1942/8/24	月	朝	1	電力を献納しよう
1154	1942/8/25	火	朝	1	夜戦の歴史的伝統
1155	1942/8/26	水	朝	1	瑞兆今年の大豊作
1156	1942/8/27	木	朝	1	医師会の新体制
1157	1942/8/28	金	朝	1	新国民運動の垂範
1158	1942/8/29	土	朝	1	ソ聯の長期戦能力

1159	1942/8/30	日	朝	1	新現地型を作れ
1160	1942/8/31	月	朝	1	建設を科学せよ 日華学会に寄す
1161	1942/9/1	火	朝	1	欧洲戦争四年目
1162	1942/9/2	水	朝	1	防諜に期間無し
1163	1942/9/3	木	朝	1	強力な現地機構へ 大東亜省の設置
1164	1942/9/4	金	朝	1	御英霊奉安の願ひ
1165	1942/9/5	土	朝	1	経済戦は国債で
1166	1942/9/6	日	朝	1	熱砂に揺ぐ旧秩序
1167	1942/9/7	月	朝	1	南方圏から宝船
1168	1942/9/8	火	朝	1	八日の日の決意
1169	1942/9/9	水	朝	1	稲作“良”に涙する
1170	1942/9/10	木	朝	1	東亜圏の政治構想
1171	1942/9/11	金	朝	1	三風肅清その後
1172	1942/9/12	土	朝	1	認識せよ新文化
1173	1942/9/13	日	朝	1	憫然たり政治攻勢
1174	1942/9/14	月	朝	1	持てる国(アメリカ)の貧困
1175	1942/9/15	火	朝	1	満洲建国十周年
1176	1942/9/16	水	朝	1	兵隊さんの貯金
1177	1942/9/17	木	朝	1	売国的自主抗戦
1178	1942/9/18	金	朝	1	満洲事変記念日
1179	1942/9/19	土	朝	1	答訪使節の派遣
1180	1942/9/20	日	朝	1	華北大日本体育祭
1181	1942/9/21	月	朝	1	米国は観念的敗者
1182	1942/9/22	火	朝	1	尊孔興亜の願ひ
1183	1942/9/23	水	朝	1	吾等の剿共闘争
1184	1942/9/24	木	朝	1	中秋節、民生を思ふ
1185	1942/9/26	土	朝	1	治安強化第五次
1186	1942/9/27	日	朝	1	倫理的国民運動 第五次治強の性格
1187	1942/9/28	月	朝	1	我等は何を完成すべきか
1188	1942/9/29	火	朝	1	我等は何を肅正すべきか
1189	1942/9/30	水	朝	1	我等は何を確保すべきか
1190	1942/10/1	木	朝	1	我等は何を革新すべきか
1191	1942/10/2	金	朝	1	日華蒙の経済紐帯
1192	1942/10/3	土	朝	1	邦人錬成の諸問題
1193	1942/10/4	日	朝	1	剿共経済の体制
1194	1942/10/5	月	朝	1	日本人と新民会
1195	1942/10/6	火	朝	1	軍人援護強化運動
1196	1942/10/7	水	朝	1	運動展開の用意はよいか
1197	1942/10/8	木	朝	1	大詔奉戴日期し我等は驀進す
1198	1942/10/9	金	朝	1	第五次運動の文教的性格
1199	1942/10/10	土	朝	1	王委員長訪満す
1200	1942/10/11	日	朝	1	敗戦特使と重慶
1201	1942/10/12	月	朝	1	正しい日の丸を
1202	1942/10/13	火	朝	1	新秩序教権の誕生
1203	1942/10/14	水	朝	1	第五次治強は倫理を狙ふ
1204	1942/10/15	木	朝	1	はるか九段のみ魂に応へん
1205	1942/10/16	金	朝	1	東と西の農産確保
1206	1942/10/17	土	朝	1	蒋介石と盛世才
1207	1942/10/18	日	朝	1	口と口、耳と耳
1208	1942/10/19	月	朝	1	全聯に期待する
1209	1942/10/20	火	朝	1	敵国を確認せよ
1210	1942/10/21	水	朝	1	建設精神 錬成の基礎
1211	1942/10/22	木	朝	1	日華銀翼に結ぶ
1212	1942/10/23	金	朝	1	華北の空の護り
1213	1942/10/24	土	朝	1	省市長会議の收穫

1214	1942/10/25	日	朝	1	生活革新の狙ひ
1215	1942/10/26	月	朝	1	汪主席と新民会
1216	1942/10/27	火	朝	1	治強に奮へ文化陣
1217	1942/10/28	水	朝	1	日暮砵に見る思想肅正の実績
1218	1942/10/29	木	朝	1	全聯と治強運動
1219	1942/10/30	金	朝	1	全聯と三清運動
1220	1942/10/31	土	朝	1	全聯と大東亜戦争
1221	1942/11/1	日	朝	1	鋭鋒はインドに
1222	1942/11/2	月	朝	1	我等中国語を身につけよう
1223	1942/11/3	火	朝	1	凱歌高らかに 大東亜の明治節
1224	1942/11/4	水	朝	1	郷村社会への視覚 農産確保の基底
1225	1942/11/5	木	朝	1	居留民行政の清新味に期待
1226	1942/11/6	金	朝	1	現地防空の体制
1227	1942/11/7	土	朝	1	対日戦略の重点
1228	1942/11/8	日	朝	1	戦時の生活から戦争の生活へ
1229	1942/11/9	月	朝	1	大東亜文学者大会
1230	1942/11/10	火	朝	1	黙々として完勝へ 大東亜戦争・冬の陣
1231	1942/11/11	水	朝	1	省長閣下も三等車に乗つて
1232	1942/11/12	木	朝	1	認識せよ新文化
1233	1942/11/13	金	朝	1	アメリカ狂へり
1234	1942/11/14	土	朝	1	“紙”は武器なり
1235	1942/11/15	日	朝	1	米英・重慶の断層
1236	1942/11/16	月	朝	1	南太平洋の死闘
1237	1942/11/17	火	朝	1	冀東の剿共進軍
1238	1942/11/18	水	朝	1	我等の錬成は目的か手段か
1239	1942/11/19	木	朝	1	噸の戦ひ船腹戦争
1240	1942/11/20	金	朝	1	共栄の大圏・小圏
1241	1942/11/21	土	朝	1	“知行合一”と学生
1242	1942/11/22	日	朝	1	大東亜結ぶ言葉
1243	1942/11/23	月	朝	1	新嘗祭にあたりて
1244	1942/11/24	火	朝	1	新アジアの文化
1245	1942/11/25	水	朝	1	反共中国の使命 防共協定参加一周年
1246	1942/11/26	木	朝	1	中国学生層の思惟
1247	1942/11/27	金	朝	1	歓迎満洲国政府代表
1248	1942/11/28	土	朝	1	必勝の戦形全し
1249	1942/11/29	日	朝	1	勝利に捷徑なし
1250	1942/11/30	月	朝	1	日華相結ぶ精神
1251	1942/12/1	火	朝	1	建艦か、献艦か
1252	1942/12/2	水	朝	1	生活革新、民生安定
1253	1942/12/3	木	朝	1	米英の利己主義
1254	1942/12/4	金	朝	1	自動車行列廻れ右
1255	1942/12/5	土	朝	1	大東亜戦争一周年の意義
1256	1942/12/6	日	朝	1	現地機構の発足
1257	1942/12/7	月	朝	1	完勝へ国債報国
1258	1942/12/8	火	朝	1	感激の大詔奉戴日
1259	1942/12/9	水	朝	1	大東亜戦争の裏側 華北にあがる凱歌
1260	1942/12/10	木	朝	1	治強運動の戦果
1261	1942/12/11	金	朝	1	“十二月八日の意識”
1262	1942/12/12	土	朝	1	第三次魯東作戦
1263	1942/12/13	日	朝	1	自己に峻厳なれ
1264	1942/12/14	月	朝	1	フランスの出路
1265	1942/12/15	火	朝	1	御親拝を刻して
1266	1942/12/16	水	朝	1	重慶の西北工作
1267	1942/12/17	木	朝	1	永遠の敵を撃滅
1268	1942/12/18	金	朝	1	虚構宣伝と民衆

1269	1942/12/19	土	朝	1	インドよ進軍せよ
1270	1942/12/20	日	朝	1	開発戦士の光栄
1271	1942/12/21	月	朝	1	翼賛運動の新展開
1272	1942/12/22	火	朝	1	主席訪日の信念
1273	1942/12/23	水	朝	1	進軍する学徒百万
1274	1942/12/24	木	朝	1	日華の民心帰一
1275	1942/12/25	金	朝	1	香港攻略一周年
1276	1942/12/26	土	朝	1	新民会の新任務
1277	1942/12/27	日	朝	1	孝道を喚起せむ
1278	1942/12/28	月	朝	1	真の指導者的態度
1279	1942/12/29	火	朝	1	什麼生(そもさん)、民心把握
1280	1942/12/30	水	朝	1	建設の三大目標
1281	1942/12/31	木	朝	1	凱歌に年暮るる